

会 議 録

■全部記録 □要点記録

1	会 議 名	姫路市社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会
2	開催日時	令和6年3月18日（月曜日）14時00分～15時50分
3	開催場所	姫路市役所 10階 大会議室
4	出席者又は欠席者名	委員7名（欠席：3名） 健康福祉局長 事務局：長寿社会支援部
5	傍聴の可否及び傍聴人数	傍聴可・傍聴人：0名
6	議題又は案件及び結論等	(1)姫路市高齢者保健福祉計画及び姫路市介護保険事業計画（案）について (2)高齢者福祉関連事業の見直しについて
7	会議の全部内容又は進行記録	詳細については別紙参照

A 委員	1. 開会 2. 議事 (1)姫路市高齢者保健福祉計画及び姫路市介護保険事業計画（案）について 介護人材の話があったが、社協でも訪問介護事業を実施している。パートのヘルパーの年齢構成を見ると、60 歳以上が 7 割を占めている。また、ヘルパーの最高齢は 77 歳と非常に高齢化が進んでいる。10 年後には、真に必要な介護サービスが提供できない状況になるのではないかと非常に危惧している。また、今回、報酬改定で処遇改善の加算率の引上げがあったが、訪問介護の事業所に入ってくる基本料は減額になるという非常に衝撃的な結果だった。介護人材の確保について、事業所がある地域によって、訪問する地域も異なり、要する時間やコストもそれぞれ異なると思うということも意見として伝えていただきたい。
事務局	介護人材は大変獲得しにくい状況であり、各施設も、県が取り組んでいるケアアシスタントのように例えば掃除、シーツの交換、配膳・下膳などの介護の周辺事業を地域の皆さんでヘルパーの資格はないけれども、研修を受けた方に手伝ってもらような取り組みも進めているが、まだ、応募が低調な状況である。 ボランティア、有償ボランティア、ケアアシスタントなど、地域の皆さんが少しずつ手伝い、ヘルパーが、より介護を必要とする方の世話に注力できるようになれば良いなという思いで、来年度から、ケアマネージャーや地域の事業者にも、この周知をしていきたいと考えている。
A 委員	本当に危機的な状況だと日々感じている。ぜひよろしくをお願いしたい。
B 委員	在宅医療・介護連携推進事業を進めていく中で、薬局や医療機関で訪問診療を担当している医師も、これからほとんど在宅の患者さんを診ていくような形になるのではと思っている。我々もまだ準備が整ってないところもあるが、事業を進めていける環境づくりをしているので、患者さんが訪問診療や薬局を利用しやすいように普及啓発の方法を考えていただきたい。 薬局でも準備が進んでいないところもたくさんある。受け入れはできるが、薬局側に情報が流れてきてないことも多いので、情報提供をお願いしたい。
事務局	施設に入るよりも、なるべく在宅で最期を迎えたいというニーズが高まっている。そのなかで、訪問診療や訪問看護のニーズも非常に高まっているので、今後、医療と介護の連携はますます重要になってくると思う。医師会や薬剤師会と連携を密にし、今後も取り組んでいきたい。

分科会長	薬剤師会でオンライン化に向けた動きは何かあるか。
B 委員	オンライン診療や、処方せんの電子化など、受け入れ可能なところも増えてきた。それらを活用しながら、患者が利用しやすい環境づくりを整えつつあるので、利用していただきたい。医療機関も含めて環境整備を進めているので、周知に協力をいただきたい。
分科会長	デジタル・ディバイドもあり、すべての人が恩恵を受けられるわけではないが、やはりこれからはデジタル化が進んでいくと、より便利になり、高齢者も安心できるようにするのではないかと思いますのでよろしくお願ひしたい。
C 委員	介護人材の不足という話もあったが、看護師もすごく不足している。在宅医療を支えるというよりは、もはや急性期医療でさえ、支えられない状況でどこの病院も苦勞されているということで少子化の影響が急激に足りなくなったという声をよく聞く。 基本目標 3 の、人生会議（ACP）は、病院でも 6 月から診療報酬の改定で、必須項目となり、すべての方に、説明や意思確認をするということが加わるが、やはり、最近、お元気な高齢者の方もすごく多く、ご家族の方も、まさか死ぬとは思わなかったとか、そのような話をしたことないという方が非常に多いので、人生会議（ACP）についてどのように啓発活動をしていこうと考えているのか具体的に教えていただきたい。
事務局	医療・介護連携推進会議で、人生会議（ACP）の部会を、開催している。会議の中でのご意見を踏まえて、今、人生会議（ACP）についての啓発のパンフレット（案）を作成しており、4 月以降、印刷し、市民への啓発や医療従事者や介護従事者向けの啓発を来年度から実施する予定である。 人生会議（ACP）を進めていくために勉強会や会議等を始めたところで、まだ具体的に実施しているわけではないが、来年度から進めていきたい。
C 委員	自治会の会議等で我が事として話し合う機会や、元気なうちから話しておくことがすごく大事だと思うので、ぜひ取り組んでいただきたい。
分科会長	看護の分野でも、人生会議への関与がすごく促されているということか。
C 委員	急性期の病院だと病気になった段階での話になるが、やはり日頃からどのように自分の人生を締めくくりたいと考えているかがすごく関係してくるので、日頃から話しておくのが良いと思っている。
分科会長	市の回答は、行政の対応はこれからますます充実していくという趣旨だったと思

	うがその理解でよろしいか。
事務局	来年度から終活支援事業の実施も予定しているので、終活支援と ACP と合わせて取り組んでいきたい。
分科会長	大都市は病床数が厳しい状況になっている。姫路は、その点まだ大丈夫だとは思いますが、最期、看取りの場も含めて、看護の分野の方の役割が非常に大きくなる。ただでさえ忙しい中だが、すごく期待されると思う。
D 委員	計画の全般を見ると、介護や医療等、施設の利用を想定した施策を充実させるという観点が非常に大きい。 私は地域コミュニティを専門に関わっているが、姫路市の場合は、日本で一番の自治会の組織率を誇っていると言われており、自治会の加入率は約 90%だが、現実には、各町内に集合住宅等があると、一括して自治会に入会するが、活動には参加しないという実態も生じてきている。 日本一の加入率を誇ると言いながらその実態は、非常に厳しくなっている。婦人会も、消滅とまではいかないが、ややそちらに傾いている。 そして、高齢者に関しては、老人会の組織率が落ち込んでいる。そのような中で、例えば体が弱ってきたらデイサービスを受けたら良いという考え方もあるが、介護保険でデイサービスをこれからも続けていくということを考えると、費用の面でも大変なことになると予想されている。 地域の中で健康な高齢者が中心になって、公民館やコミュニティ施設等を利用して、老人会の活動の延長、あるいは行政がもっと関与しながら、健康な人は高齢者が若い人に頼るのではなく、自分たちで楽しむデイサービスのようなものをもっと展開していかないと、これからの高齢者福祉は成り立たなくなる。計画においてそのような視点に関する記述が非常に弱い。現行の介護保険や医療のサービスの中で何をしていくかということだけに留まっている。その分野の人材がいらないからどうしようかということも、もちろん大事だが、高齢の健康な人、あるいはやや虚弱な人たちも交えて、それぞれの地域で楽しく過ごせるようにもう少し行政が資金的な援助をしなければ、介護保険料や医療保険料の中だけで賄おうとすると、非常に無理もあると思う。 高齢者福祉関連事業の見直しについても、その視点が欠けているから、制度を見直して縮小していくということだけになってしまっている。そのような観点をもう少し打ち出していかなければならないと強く思う。
事務局	地域コミュニティの弱体化が叫ばれて久しいが、今回、能登の地震でも、やはり何かあれば一番頼りになるのは隣近所だという話もある。その中で、近所に高齢者がいるかいらないか、もしいるならば、こういうときにはどうしようという日頃からの助け合いも非常に大事だと思うので、近所同士のつき合いについて見直してい

	なければならないと思う。 計画は虚弱になった方に関する内容を中心に策定しており、そこまでの視点が欠けているという指摘だが、本当にその通りだと思う。その部分については、高齢者福祉関連事業を見直し、各種施策を展開する中で、新しい外出支援についても検討しているので、対策を練ることに注力したい。
分科会長	私も姫路市に初めて来たときに、老人クラブへ調査の依頼に行ったが、その時に姫路市は老人クラブの組織率がかなり高く、自治会等の町内会の組織率も高いことを教えてもらった。しかし、土地柄も関係すると思うが、地域コミュニティの現状は、少し残念に思う。 委員ご指摘のようにやはり行政側の対象者に漏れがあるのは良くないと思う。私も学生に健康や福祉関係のことを教えており、授業の最後に感想や意見を書かせると、「もう今からの日本は真っ暗だ」、「高齢者ばかり」ということになる。やはりまだまだ人生経験もそれほど長くはないので、将来はもう自分たちが全部背負わないといけないのではないかと考えている。今の若者も一生懸命考えて協力したいという気持ちはある。その気持ちは大切にしてほしいと学生に伝えている。 やはり身近なところで横のつながりのますますの強化、地域のつながりがより重要になってくる。
E 委員	姫路市には 927 名の民生委員児童委員がおり、日々、高齢者宅への訪問や安否確認等の地域福祉活動をしている。人生 100 年という言葉があるが、一方では、あまり年を取って長生きするのもどうかということも言われている。 また、介護保険制度の運営にも費用がかかるため、計画書概要版 10 ページの所得段階別介護保険料にあるように、高齢になって年金生活という方もいる中で、年金から天引きされる保険料の額は上昇している。致し方ないと思うが、高齢者にとっては生活していくのが厳しい時代を迎えているなど感じている。
分科会長	姫路市の介護保険料は全国的には平均水準か。
事務局	全国的には平均水準である。
分科会長	2000 年に介護保険制度が始まった当初の保険料は全国平均で 3,000 円前後だった。 私が当時関わっていた自治体では、県内でも市町村によっても保険料に差がついて、施設が多すぎるからかかるのかという議論があったのを思い出す。おそらく姫路市は良い水準を保っていると推察できるが、人口構成が変わる可能性があるが、今後も良い水準を維持されたい。 私の周囲でも、年金で生活している方が、毎月の心配もあるが、「自助努力で頑張っていけないと。」と話している。そういう状況の方への目配りをしていかなければ

F 委員	ればと思う。 自治会の役員をしているが、この3月末で退任することになった。 これからは、例えば粗大ごみの収集や高齢者の見守り等で必要な時にサポートをしていきたい。今、自治会役員の代が変わり、70歳ぐらいまで現役で仕事をしており、自治会活動に注力をする人ができない人もいます。その人たちの分を私が補完しているが、高齢者は昨今のデジタル化に一番困っている。 老人クラブは一体何をしているのかと言われると、体を労る、つくる、維持する、お世話にならないようにする等自分のことは自分でできるようにするという生涯現役が第一、それから、地域のためのボランティア活動、世代間交流を行い、伝承することも大事。高齢者は安全性には敏感な傾向があり、それらの啓発にも注力しているが、高齢者はデジタル化が一番怖いと感じている。 買い物に行っても次々と新しい機械が導入される。そのたびに、誰かがついて指導してくれるなら安心だが、そうでない人はスマホを持っていない人もいるため、レジのところに行くと、自分ですべて操作することを非常に苦手だと感じている。そんなときに、ちょっとした手助けがあると、安心でき、買い物が億劫にならない、高齢者は特に億劫になるのが早い。 私は民生委員の経験もあるが、独居高齢者は見守りの対象になっているが、いわゆる老老介護の状態の夫婦は見守りの対象になっていない。 高齢夫婦は万一のことがあっても、対処の方法がわからないということもある。そのため、老人クラブでは、会員の独居高齢者を月に1回見守りするという事になっているが、追加で、高齢夫婦への声かけにも取り組んでいる。私の場合は、民生委員を経験し、つながりがあるので進めることができるが、大抵のところは、余裕がない、老人クラブと民生委員の繋がりが無いという理由で民生委員と話し合い、棲み分けをすることができていない。 介護職員も、外国人を雇用する施設もある。外国人を雇用しても介護人材が足りない。一方でこれから介護を必要とする人間はますます増えていく。やはり老老介護は怖い。 すぐに受診をしなければ手遅れになるような人がいても、お金がかかることなので、受診を勧めることができない。自宅で倒れた人を引っ張り出す現場も立ち会ったことがあるので、やはり、人とのつながりや隣近所で見守ることがものすごく大事になる。そうすることで介護保険給付費減も期待できるのではないかな。昔のように、親が孫の世話をして、親が弱ってきたときは、息子や嫁が世話をしてくれるという時代ではない。成果主義の欧米とは異なり、日本は、人間性を評価に含んでいるので、お金だけではない部分もある。 様々な社会背景があるが、役員の中でも何人かは、都合の良いときだけ手伝いに来るということもある。だから、長い間一緒に活動して、周囲に担い手として育ててくれることを願うしかない。話の中で、高齢者の話が結構出てくるが、高齢者は高齢者なりに、生涯現役ということで頑張っているのでもっとお願いしたい。
------	---

分科会長	日本社会が持っている非常に無駄がない今までの社会づくりは継承していかなければと思う。デジタル化について、これからの世の中に必要だというところがある一方で、適切な対応が求められているのでその点を確認したい。
事務局	令和6年度より、デジタル・ディバイド対策事業ということで、スマホ教室、スマホ等のよろず相談等、スマホの操作について気軽に問い合わせできるような制度を複数用意し、少しでも高齢者の方々がスマホに親しんでいただく、あるいはデジタル・ディバイド層を少しでも減らしていけるような取り組みを進めていきたい。県の事業のはばタン Pay 等、最近では紙の商品券ではなくてすべてデジタルチケットになり、高齢者に施策・サービスが行き届いていないのではないかとという批判も多々受けていると思う。人材難やデジタル化等は今もう避けて通れない日本全体の問題だ。しかし、高齢者を取り残すわけにもいけないので、よろず相談、スマホ教室等できる限りのことをして少しでも高齢者にもそのデジタル機器に親しんでもらえるように取り組み、前に進めていきたい。
F 委員	老人クラブで、いきいき百歳体操をやっているが、そこに姫路市はポイントをつけている。そのポイントは一体どうなったのか。スマートフォンの機種変更で、ログインしたものが消える等色々なトラブルを起こす。それと、高齢者向けのらくらくフォン等の簡易のスマホは対応していない。ポイントの還元について、どうなったのかと尋ねられる。一体どのように進んでいるのか。 高齢者が苦労して、操作方法を覚えて、スマホを買うということを推進するような話が出ているが、苦労しても、ポイント還元できないということが分かってもうやめているところも結構ある。
事務局	いきいき百歳体操に参加した方にポイントを付与するということについては、ポイントを獲得するためにいき百に参加してもらおうということで始めたが、実はらくらくフォンという機種にはそのアプリが入らないということや、アプリの操作方法がわからず、煩わしいから、いき百に行かないというような、逆効果が生じてしまっている。そのような状況を踏まえ、来年度に実施予定の高齢者向けの新しいアプリの開発に関しては、今までのポイントと別の、よりシンプルなものとし、簡単にポイントを貯めて、簡単にポイントを交換してもらえるような設計にしようとしている。反省を踏まえた形で進めたい。 4月以降に24か所の会場に市から出向き、9月末までに交換申請ができるように個別に操作の支援等を行いたい。
F 委員	この場だけでなく、広く周知してもらいたい。 要介護認定は、申請から2週間ぐらいで結果が出る市町村がある一方、姫路市はコロナ禍以降、1か月過ぎても出てこないのが結構多い。結果が出るまでに、ベッ

	ドや手すりを用意しなければならない時に、結果が出ていないと見積もりをしても らえないため、あわてて用意することになる。 私の地区では、特別養護老人ホームや認知症高齢者グループホームにいる人も、 いきいき百歳体操に参加してもらっている。そこで会話をしていると、市外、県外 から来ている人もいる。一緒に話をすることが予防の1つだと思う。そのあとで認 知症サロンに参加し、話をしたり、聞いたりしてもらう。できるだけ多く開催した いとの思いから私の地区では1週間に1回開催している。月に1回は出前講座を設 けて聞いてもらっている。若い人は仕事をしているので、できるだけ認知症になら ないように高齢者自身で認知症予防のために働きかけていかなければならない。高 齢者で考えて開催するというのが我々の役目。 このようなニーズが増えていくことは明らかなが、老人クラブの会員数も減って いる。自主的に取り組んでいることがグラウンドゴルフしかないと思われているの が減っている理由だと思う。私の地区では手作りの会を開き、いろいろな手作りの ものを高齢者宅へ届ける等の取組があるからか、何とか、入ってくる人がいるが、 グラウンドゴルフ等、自分の体のための取組が精一杯で、人のことまで手を出す機 会が少ないので、老人クラブはグラウンドゴルフをやっていると思われているので はないか。色々取り組んでいるが、なかなか思うように進んでいない。
分科会長	ポイント交換については、このような会議の場だけに限らず、姫路市も広報をし ていくということは確認した。 独居高齢者の問題について、当然男女関係なくということにはなと思うが、研 究等を見ると独居の男性のケアというのが全国的に求められているようなので、そ の視点も非常に重要だと思う。
F 委員	(2)高齢者福祉関連事業の見直しについて 利用する交通機関は、住んでいる地域によって傾向が異なるので、地域的に考慮 してもらえると電車のカードの利用方法の考え直しができるのではないかと。地域的 な考慮があると、利用価値があつて、みんな喜んでいたと思う。 見直しについて、もともと蚊帳の外で、我々が聞いたときにはもう決まっていた ような状態だった。老人クラブでも圧力団体的な気概がないと、要望を实らせるこ とはできないのではないかという話を本部でしている。 バスの自己負担額の150円への変更は、何とかならないかという声がある。物価や 給料の水準が上がることも影響しているのかもしれないが、年金生活の者もいる。 地域的な議論は一度も出なかったと思うのでもう一度考えていただきたい。
事務局	地域的な考慮は見直し案には盛り込めていない。 利用者にとっては大変不便になるが、これから高齢者になる方のためにこの事業 を続けていくために苦渋の選択をした。

E 委員	今後、デジタル化が進み、新しい方法があれば鉄道の再開も考えていきたい。 今回の見直しについて、特に異論はなかった。 新規事業等は、民生委員児童委員連合会の正副会長会、理事会で報告を受けている。 アンケート結果を見ると、75 歳というともう後期高齢者だということを感じる。 自分で運転することが急激に減るのが良いのか、運転機会の激減によって認知症が進むのではという意見もある。ある程度は、運転も容認されても良いのではないのか。若者の方が事故率は高いと思うが、高齢者の事故は、大々的に報道される。 また、社協の事業にふれあい食事サービスやふれあいサロン等があり、地域の方たちに声掛けし、70 歳以上の方にもたくさん手伝ってもらっている。 やはり社会性を持たないと認知症等になる可能性が高まるということで、元気なときは参加してほしいというお願いしている。
分科会長	実際には交通事故の数は全国的に減ってきているはずだが、高齢者の事故がものすごくクローズアップされてしまう。年代的にも高齢者が突出しているかという点、必ずしもそうではないはず。 車が暴走した映像が出てくると、取り上げ方で、高齢者がいる家族も運転するのをやめた方が良いという風潮になりやすいので気を付けなければならないと思う。
D 委員	高齢者福祉関連事業の見直しについては市議会定例会の議案にある予算案に計上されている。3 月 19 日の本会議で採決の予定だが、大半の議員が賛成する見通し。賛成する大きな理由は、持続可能な制度として成り立たなくなってしまうという点だが、今日の資料はその点に関する説明が少し不足している。いつできた制度なのか、例えば高齢者バス等優待乗車助成事業は、当初無料で始まり、途中で自己負担が 50 円となった、船舶も途中で追加となった等、色々な背景がある。当時は高齢者がそんなにいなかったのが、今は増えているということが一番大きい。これ以上、今の状態で続けていくのは不可能だという判断を議員もしている。 多くの人の理解を得る必要があるのに、ただ合理化しているだけと思われるので、議会での議論とも少しずれてしまうので、市民、特に学識経験者の方には正確に伝えてもらいたい。 今回の見直しに関連して、鉄道が廃止になり、タクシーの要介護要件を撤廃するため、タクシーの選択者が増える可能性が高い。タクシーというのは 1 台に、1 人、1 つの家族、友達同士という単位で乗るものだが、タクシーは車両が小さいので、たばこ吸う運転手だと、不快に思う人もいるということを聞く。タクシーは客待ちの時間が長く、その間にたばこ吸う運転手もいる。ハイヤーで呼ぶ人は、タクシーの運転手でたばこ吸う人を断ることもあるらしいが、そうでない場合も多い。ぜひ、タクシー業界にもタクシー乗車時の運転手さんの喫煙とエチケットについて呼びかけを求めている。乗車時に不快な思いをするのは好ましくないのでタクシー業

	界ともよく協議してもらいたい。 もう1点は先ほどのアンケートの最後の後段で、人生の最期について書いている。健康福祉局とは直接関係ない話だが、この10年の間に、家族葬が非常に増えてきたと感じる。家族葬や墓じまいが増え、その中で、お葬式のあり方そのものが変わってきた。今までは珍しかった、直葬、つまりお葬式もしないというような形態まで増えてきた。姫路市は名古山霊苑に納骨堂がある。市の納骨堂やお寺の納骨堂を利用するのが増えてくる傾向だが、姫路市の納骨堂は、永遠に、管理してくれるため、納めたままになる。民間のお寺の納骨堂だと、例えば30年経つと、納骨壇から合葬墓に切り替えるというような形がある。他の公営施設でも最近では合葬墓、たくさんの方の遺骨をまとめて納めるという形で、個別の入れ物に納めるということではなく、一緒に、お骨を埋めるというような形が、これから主流になってくると言われている。 姫路市でも、数が限られているのにもかかわらず未来永劫管理できるのか、持続可能になるのかを考えたときに、法律上の議論は必要だが、姫路市の納骨堂も期間を設ける必要がないのかどうか、あるいは合葬墓のようなものを市としてやるべきではないかということを考える必要があるのではないかな。終活と言うのであれば。安心して墓じまいができる、あるいは納骨堂に納められるように多くの選択肢を用意する必要がある。その選択肢を行政が用意できていないところが課題だと思っている。名古山霊苑のあり方、納骨堂の保管年限や合葬墓等についても、姫路市全体として考える時期がきているのではないかな。
F 委員	お墓なしで納骨だけということで、お寺でも納骨堂だけのところもあるが、場所がなくなるということにはならないのか。
D 委員	姫路市は、今のところは墓も用意し、納骨堂も用意するということが、足らなくなってくることは間違いない。しかし、墓じまいをして納骨するというスタイルに変わってきている。足らなければ新しく作ればということで、林田町伊勢に姫路西霊苑を作ったが、予想外の結果となった。そのような状況が続いていることや最近の葬儀の状況を見たときに、姫路市の墓や納骨堂のあり方を公営である以上は検討しなくてはならない。 時代や社会の変化を捉えて研究しなければ、対応しきれなくなる。
F 委員	社会の変化は核家族化が進んだことが理由ではないか。自ずと政府がそうなるようにしているのか。
D 委員	そのようなことはない。墓のことだけでなく、例えば最近では子育て支援や少子高齢化対策と言われるが、国や地方自治体等公権力を持つものは、国民や住民の幸せを応援しているのであって、核家族化を目指す、大家族化を目指す等に国や自治体が直接関与しない。国民や住民の考え方を応援するのが政治家の役割だと思う。

分科会長	家族のあり方等様々なことを踏まえて、高齢者福祉については考えていく必要がある。市もそのことを踏まえていただきたい。
事務局	竹中委員の意見の１点目、資料について、今日は少し整理できていないところがあった。今後、市民へ説明する際には、十分配慮しながら説明を尽くしたい。 タクシーの件については、受動喫煙で副流煙の中にも相当量の有害物質が含まれているということを聞く。分煙が進んだ今、より敏感になっている。吸う人はあまり気づかないかもしれないが、吸わない人は本当に敏感なので、意見をタクシー業界にも伝えていきたい。 納骨堂の件は、終活支援ということでやっていく中で、葬儀やお墓の話についても踏み込んでいくので、市民局等とも情報共有し、市の方向性を考えていきたい。
C 委員	終活支援事業というのが、事業としてはこの名前で良いが、もう少し市民にわかりやすい、もう少しポジティブにとらえられるようなネーミングがあった方が良いのではないか。亡くなってから困るというよりは、どのように自分の人生を終えるかというところについて何らかの対策があれば良いのではないかな。
事務局	様々な意見を頂戴し、ふさわしいネーミングを考えていきたい。 この分野は先進的な都市も数市あるため、他都市の事例を参考にしながら事業を進めたいと考えているので、引き続き情報収集に努めて、よりよい事業としたい。
分科会長	少し話がずれるが、今日もフレイルという言葉が出てきた。この言葉も使われて久しい。介護予防事業に関する研究はもともと日本がものすごく進んでいたが、フレイルという言葉が出てきたのはアメリカからだ。健康な状態と介護予防は２つで考えられがちだがフレイルという状態に気づけば健康な状態に戻りますよという考え方が前提になっており、前向きというか、もう後は悪くなる一方だということではないということを感じさせてくれた価値はあると思う。
B 委員	認知症カフェの拡充について、今まで姫路中央病院のみの開催だったところを県立はりま姫路総合医療センターと高岡病院を加えて３施設に増やすということだが、医療関係者、専門職も一緒に手伝うことができればとの思いがある。現状、姫路中央病院で開催している認知症カフェに通っている人が何人ぐらいかと開催回数を教えてもらいたい。
事務局	今、姫路中央病院では、令和５年４月から月１回、第４金曜日に開催している。参加者は、令和５年の１２月末現在で延べ１００名ぐらい。次年度からは姫路中央病院、はりま、高岡でも開催するが、開催回数は最終調整をしているところである。 認知症サロンを地域で開催してきたが、認知症の方がなかなか参加しにくいとい

B 委員	うことがあった。認知症疾患医療センターであれば患者やその家族も来ておられるので、認知症疾患医療センターで開催すると、専門職の方の相談に繋がりやすいということで拡充を進めた。 認知症サロンに来てもらいたいが、認知症という言葉がついてしまうと、足がなかなか前に出にくいという家族の意見もあると思うので、病院での開催場所を増やして、認知症の人の予防や見守りを増やしていくのが良いと思うので、協力したい。
A 委員	アンケートの中で私がしたいことというような項目があり、やはり親しい人と会話をしたり、家に閉じこもらないように意識して外出したりというところで、社会福祉協議会が行っているふれあい食事サービスやふれあいサロン等のふれあい活動に、地域の方に来てもらい、そこで楽しく会話してもらい、色々な刺激を受けてもらうのはやはりすごく大事なことで感じた。 支部ですが、自治会、民生委員・児童委員、老人クラブ、地域の方々等に支援、協力いただきながら、運営しているところであり、市の受託事業もあるので、今後力を入れていきたい。 支部の活動においてもやはり担い手不足ということが顕著になっており、そこについても社協で重点的に予算を取り、今年度から取り組んでいるところなので、次年度も引き続き、地域の実情に応じた形で、担い手育成のためにできることがあればということで検討していきたい。 また、アンケート結果のデジタルに関するところでやはりデジタルツールが使えないという結果もあった。市としてデジタル・ディバイド対策、デジタル活用、お出かけポイント等に取り組まれるということだが、一方でスマホとかアプリとか、安全性について不慣れな方が使うと、ウィルス感染や不審なサイトへの誘導等、心配に感じるので、対処をお願いしたい。
事務局	社会福祉協議会とも情報共有や連携を密にしながら、今後も取り組んでいきたい。デジタルについて、悪質なものが後を絶たない。大手通信会社いわゆるキャリアからも情報提供を受けながら、その内容を周知することによって注意喚起をしていくというのも、重要な対策だと考えている。あらゆるところで、メリットだけでなくデメリットや怖いこともあるということを、併せてご説明する責任が行政にはあると思うので、そのような形で進めていきたい。